

社 会 科

社会科部 樋口 晃 井出 悠介 佐藤 真樹

研究協力者 宮崎 沙織

I 社会科における「社会に変革を起こす子ども」について

自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるように働きかける子ども

本校の学校教育目標「つよく ただしく かしこく」を具体化した児童の育成のためには、各教科等の学習指導要領を基に、本校の児童の実態を踏まえて捉えた資質・能力を育むことが必要である。社会科の問題解決的な学習では「社会的事象への深い理解を基に、自ら社会参画する資質・能力」を育むことを目指す。この資質・能力と、社会科の問題解決的な学習の過程の具体は、以下のとおりである。

社会的事象への深い理解を基に、自ら社会参画する資質・能力

(1) 知識及び技能

社会的事象に関する知識と社会的事象について調べ、まとめる技能

(2) 思考力、判断力、表現力等

社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり社会への関わり方を選択・判断したりして表現する力

(3) 学びに向かう力、人間性等

社会的事象に関する問題を主体的に解決しようとする態度、社会の一員としての自覚と愛情

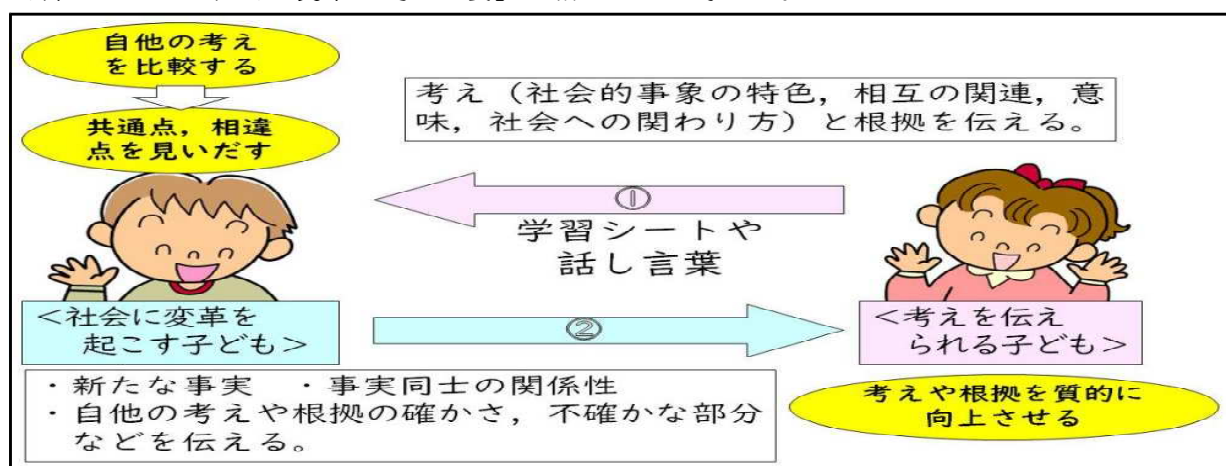
<「社会的事象への深い理解を基に、自ら社会参画する資質・能力」についての三つの柱>

過程	学習活動
つかむ	社会的事象と自らの関わりを話し合う 学習問題をつかむ 予想をもち、学習計画を立てる
追究する	予想の検証に向けて、調べる 社会的事象の特色や相互の関連、意味について話し合う ※学習計画に応じて点線内を繰り返す
まとめる ・ 生かす	学習問題の結論をまとめ、学習成果を振り返る よりよい社会に向けて、自らの社会との関わり方を考える

<本校社会科の問題解決的な学習の過程>

全体研究を踏まえ本校社会科部では、社会科における「社会に変革を起こす子ども」を「自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるように働きかける子ども」と具体化した。質的に向上するとは、

根拠を多様にしたり，更新された価値認識を基に考えや根拠を改めたりする中で，複数の情報を結び付けて関係性を見いだして知識を概念化することである。価値認識したことは，資料の選択，読み取りや考えをもつ際の一人一人の判断基準となる。社会科の問題解決的な学習において，児童は既有知識や生活経験では説明が困難な社会的事象に出合い，学習問題をつかむ。その解決に向けて，資料から調べた事実や，自らの既有知識，生活経験などを用いて自らの価値認識を基に社会的事象の特色，相互の関連，意味について自らの考えをもつ。そして，友達と考えや根拠を伝え合うことを繰り返すことで学習問題を解決し，よりよい社会に向けた自らの社会への関わり方を考えていく。この中で，自他の考えや根拠を比較して共通点や相違点を見だし，新たな事実，事実同士の関係性，自他の考えや根拠の確かさ，不確かさを伝え合う姿が見られた。その際，集団において対話が活発化し，児童は根拠を多様にしたり，更新された価値認識を基に考えや根拠を改めたりしていた。そして，その中で複数の情報の関係性を見だし，情報を結び付けて知識の概念化を進めることができた。この姿は社会科における「社会に変革を起こす姿」に相当すると考える。



＜「社会に変革を起こす子ども」と考えや根拠を伝えられる子どもの関係＞

また，本研究で捉えた「自他の考えや根拠を比較して，見いだした社会的事象の特色，相互の関連，意味，社会への関わり方を伝え，友達の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども」の姿は，資質・能力の三つの柱が相互に関係し合うことを活性化している姿であり，社会科の問題解決的な学習の中で，上記のような姿が現れることを積み重ねることにより，本校社会科で捉えた資質・能力を育成することができる。

2 社会科における「社会に変革を起こす子ども」の姿が現れるための学習指導の工夫

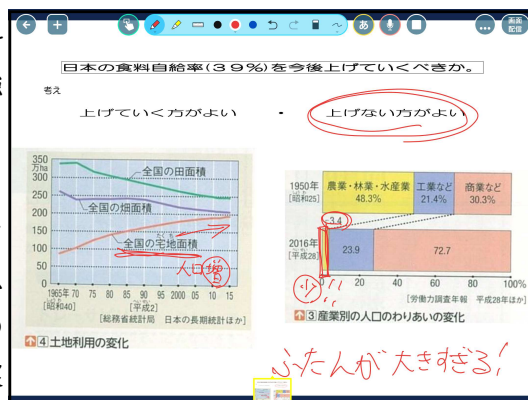
これまでの本校社会科の研究や実践の中で，「自他の考えや根拠を比較して，見いだした社会的事象の特色，相互の関連，意味，社会への関わり方を伝え，友達の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども」に相当する児童は，「調べた事実」「他者の考えや根拠」「社会科での既習内容」「他教科等での学習経験」「生活経験」などの情報を活用することに長けており，資料から問題解決に必要な情報を取り出し，それらを結び付けて関係性を見いだしたり，自他の考えや根拠を比較して共通点や相違点を活用したりすることができていた。一方で，自他の考えや根拠の不確かさを自覚できないことが原因で，次のような児童の姿も見られた。

・考えを伝えるのみで話し合いを終える。【情報の関連付け】

そこで、「自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども」の姿が現れるように、「情報の関連付け」や「情報の処理、表現」を重視し、学習指導の工夫を行うこととした。

自他の考えや根拠を視覚化して伝えることを支援する学習シートの用意

「自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども」の姿が現れるためには、話し合いの中で、自他の考えや根拠の共通点や相違点に気付けるようにすることが必要である。そこで、自他の考えや根拠を視覚化して伝えることを支援する学習シートの用意を行う。この学習シートは、個人で作成し、小集団での話し合いで、調べた事実を基に考えや根拠を表出する際に用いる。作成するときは、考えを短い言葉で書き込み、その根拠となる資料を貼付する。そして、資料の着目した部分を色付けして強調したり、事実同士の関係性を線で結んで示したりする。小集団において、同じ構造の学習シートを用いながら話し合うと、考えや根拠となる資料、事実同士の結び付けなどが視覚的に捉えられるため、互いの考えや根拠の共通点や相違点に気付きやすくなる。それにより、自他の考えの不確かさを自覚することができるので、新たな事実や事実同士の関係性、資料の解釈を伝えることを繰り返し行うことにつながる。



<自他の考えや根拠を視覚化して

伝えることを支援する学習シート>

なお、この学習指導の工夫をICTを用いて行うことのメリットは以下のとおりである。

- 児童が、資料を加工できる。比較しやすい構造（並列など）での提示やトリミング、拡大等
- 考えや根拠を視覚化できる。事実の結び付け方の提示、資料の着目した部分の強調等
- 試行錯誤できる。資料の選択や入れ替え、書き込む内容の修正等

自他の考えや根拠を共有する機会の設定

「自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるよう働きかける子ども」の姿が現れるためには、話し合いの中で、新たな価値認識をすることが必要である。そこで自他の考えや根拠を共有する機会の設定を行う。これは、小集団での話し合いを行う前に、ロイロノートの提出箱機能を用いてそれぞれの学習シートを回収し、小集団の児童同士が互いの考えや根拠を共有できるようにすることである。事前に考えや根拠を共有する時間を確保すると、自他の価値認識の相違点に気付く機会が増えるので、他者の考えや根拠に対して疑問や興味をもつ。すると、その後の話し合いで自他の考えや根拠の不確かな部分を基に質問したり、自らの考えや根拠の妥当性を伝えたりしやすくなる。なお、この学習指導の工夫をICTを用いて行うことのメリットは以下のとおりである。

- 考えや根拠の共有が即時に行える。 学級全体での共有, 小集団での共有
- 考えや根拠を比較しやすくなる。 比較する回答を抽出し, 並列に配置できる

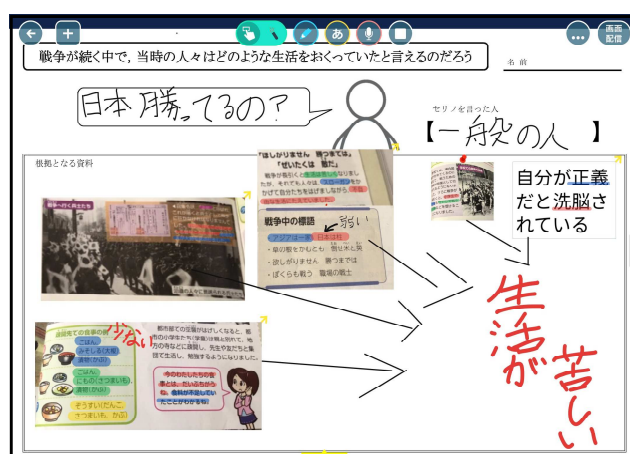
＜具体例 6年 「長く続いた戦争と人々の暮らし」＞

○本時のねらい

- ・「戦争中の人々はどんなセリフを言うだろう。」について戦時中の諸資料を基に話し合うことを通して, 15年間続いた戦争下での人々の暮らしの様子を捉える。

○使用するICT 「ロイロノート」

- ・考えを書き, 根拠となる資料を貼付するよう促す。資料は教科書や資料集から探したり, 図書室の本を持参したりする。カメラ機能で撮影し, 不要な部分をトリミングして図に貼付する。



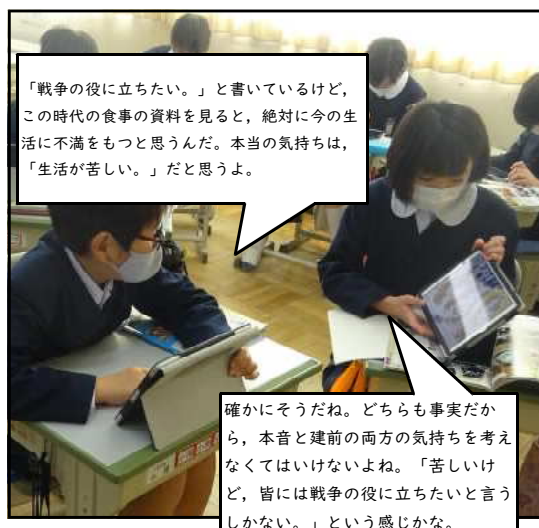
＜資料を選択しながら考えをまとめている様子＞ ＜考えと根拠となる資料を貼付した学習シート＞

○互いの考えや根拠を共有する機会の設定



＜図を小集団で共有している画面＞

○2～3人の小集団での話合いの設定



＜着目した部分を示しながら他者に伝える様子＞

3 成果と課題

本校社会科では、「**自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるように働きかける子ども**」の姿が現れるよう、その授業における具体の姿や学習指導の工夫について研究を進めてきた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

○成果

児童は、学習問題の解決に向けて、資料を見直したり、これまでと違った資料を見たりすることを通して、根拠を多様にしていた。そして、問題に対する自らの答えを問い直して改めたり、答えに自信をもったりして、根拠とともに伝えていた。伝えられた児童は、新たな事実を自らの答えに取り入れたり、調べた事実に対する解釈を改めたりすることで、事実と事実の関係性を見いだし、考えをまとめていく姿が見られた。

これらの姿は、本校社会科部で想定した「**自他の考えや根拠を比較して、見いだした社会的事象の特色、相互の関連、意味、社会への関わり方を伝え、友達の考えや根拠を質的に向上できるように働きかける子ども**」の姿である。これは、本校社会科で設定した学習指導の工夫により、児童が自他の考えや根拠の相違点を見いだしたり、新たな価値認識をしたりした成果であると考えられる。

○課題

児童は、自らの価値認識を基に根拠となる資料を選択したり、解釈したりしていた。価値認識の相違が活発な対話を生み出し、価値認識の更新につながっていた。一人一人の価値認識の高まりが、よりよい社会への関わり方を見いだすことから、問題に対して考えたり、話し合ったりする時間を十分に確保することが必要であると感じた。そのため、今後は、ICTを活用した授業改善を一層進めるとともに、ICTを用いて調べることを授業以外でも行えるようにしていくことが有効であると考え

【参考文献・資料等】

- ・文部科学省『学習指導要領解説 社会編』平成30年2月，日本文教出版。
- ・小倉勝登『社会科教師の授業・学級づくり「仕掛け学」』東洋館出版社，令和2年7月。
- ・澤井陽介『小学校新学習指導要領 社会の授業づくり』，明治図書，平成30年4月。
- ・澤井陽介，加藤寿朗『見方・考え方【社会科編】』，東洋館出版社，平成29年10月。